



TITLE:

自然言語における量化と否定の相互作用 —「シカ・・・ナイ」構文を例として—

AUTHOR(S):

松井, 良枝

---

CITATION:

松井, 良枝. 自然言語における量化と否定の相互作用 —「シカ・・・ナイ」構文を例として—. 人文學報 1996, 77: 141-164

ISSUE DATE:

1996-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/48471>

RIGHT:

## 自然言語における量化と否定の相互作用

— 「シカ・・・ナイ」構文を例として —

松井（山森）良枝

- 1 はじめに
- 2 先行研究
- 3 「シカ・・・ナイ」構文の意味論
- 4 「シカ・・・ナイ」構文の統語構造と意味
- 5 統語構造と意味の対称性と述語のタイプ
- 6 おわりに

### 1 は じ め に

否定対極表現（NPI）は常にナイとの同節要素<sup>1)</sup>の条件を充さなければならないという制約をもつことが指摘されている（Oyakawa, 1975, Muraki, 1978）。(1d) が非文法的なのは、シカが補文（コト節）内にあるにもかかわらず、ナイが主文内にあり、上の条件を充していないことに原因があるからである。

- (1) a. [馬がビールを飲む] ことが面白い。  
b. [馬がビールを飲む] こと シカ 面白くナイ。  
c. [馬がビールシカ飲まナイ] ことが面白い。  
d. \* [馬がビール シカ 飲む] ことが面白くナイ。

ところが、本来補文内の要素であるはずのシカが、「～ことができない」「～ことがない」「～わけではない」「～と思わない」などの橋表現（bridge expressions）を介して、下の (2b), (3b) のように、構文上より上位にある主文レベルに位置する否定表現と呼応し得る場合がある<sup>2)</sup>。

- (2) a. 私は [花子シカ [来ナイ]] と思う。  
 b. 私は [花子シカ [来る]] と思わナイ]。  
 (3) a. 彼は [ご飯シカ [食べナカった]] ことがある。  
 b. 彼は [ご飯シカ [食べた]] ことがナイ]。

このような現象が本稿の考察の対象であり、従来、(シカは補文内に留まったままであるが、ナイが補文から主文に繰り上がるという意味で) 否定辞上昇と称されてきた。その結果、否定辞上昇については、構文上異なる位置にある (と考えられた) 否定辞とシカの呼応関係が注目されがちであった。しかし、(2b) は (2'b) のような構造かもしれない。

(2')b 私は 花子シカ [<sub>s</sub>  $\phi$  来る] と思わナイ。

また、(2)と(3)を比べれば、(2)ではa文とb文を意味を変えずに交換できるが、(3)ではa文とb文を意味を変えずに交換できず、否定辞上昇前と後で意味に変化が生じるという違いがある。

ところで、シカに類似した限定機能をもつものにダケがある。たとえば、次の(4)を(5)に言い替えられるように、シカはダケが導入する含意を否定文に導入する働きがある。ここでは、(4)(5)の論理形式を(6)のように表示しておこう。

- (4) 花子は ご飯シカ 食べナカった。  
 (5) 花子は ご飯ダケを 食べた。  
 (6)  $\text{Exist}(t) \text{ all}(y)[(t < t_0) \text{ and } (\text{eat}(t, H, y) \rightarrow \text{gohan}(y))]$   
 ( $t$ : time.  $H$ : Hanako.)

(6)は「過去のある時点で食べた物全てがご飯だったことがある」を意味している。しかし、複文の(3)では、(6)と同じ意味を表示しうるのはa文だけで、b文は、「これまでに食べた物全てがご飯だ」を意味している。ここでは、(3b)の論理形式を次の(7)のように表記しておこう。

- (7)  $\text{All}(t) \text{ all}(y)[(t < t_0) \text{ and } (\text{eat}(t, H, y) \rightarrow \text{gohan}(y))]$   
 ( $t$ : time.  $H$ : Hanako.)

ここで問題となるのは、このような論理的意味の差が、(3)ではなぜ生じ、(2)ではなぜ生じないのか、である。本論は、そのメカニズムを、シカは常にナイとの同節要素の条件を充さな

ければならないとして、以下で述べる理由によって、(2b) は先述の (2'a) のような構造をもつと見なしうるとの立場にたって、明らかにしようとするものである。

本論の構成は以下の通りである。まず、第2章で、先行研究を概観し、その問題点を抽出する。次に、第3章で、単文構造をもつ「シカ・・・ナイ」構文の意味が産出されるプロセスを、シカの限定機能とナイの相互作用から明かにする。その上で、複文構造をもつ「シカ・・・ナイ」構文には、(i) (3a, b) のように表層構造の違いにより、(6)と(7)の異なる読みをもつ例と、(ii) (2a, b) のように表層構造の違いにも関わらず、同じ読みをもつ例とがあることを指摘する。続いて、第4章で、(i) について、シカの移動を意味論に動機づけられた移動と見なすことによって統語構造と意味との対称性を説明しうることを提案する。続いて、第5章で、(i) に関する第4章の説明が(ii) にも適用できることを提案し、その理由として、(i) と(ii) の差が究極的には主節述語の性質の違いから生じる表層的な現象にすぎないことを示す。最後に、第6章はまとめである。

## 2 先行研究

否定辞上昇現象についての従来の記述は、2つの流れに大別することができる。1つは、否定辞の補文からの繰上げによる派生を仮定する分析であり、これを「統語的アプローチ」と呼ぼう。いま1つは、上のような派生を仮定せず、文の表層構造に適用される意味解釈規則の中で、橋表現という概念に基づいて問題を解決しようとする分析である。これを「意味解釈アプローチ」と呼ぼう。統語的アプローチには、Oyakawa (1975), Muraki (1978) など、意味解釈アプローチには、井上 (1976/1978), 太田 (1985), Kato (1985), McGloin (1976) などあげることができる。本章では、2つのアプローチの中で代表的な先行研究を簡潔に示して、その限界を明かにした上で以下で検討すべき問題点を抽出する。

### ① 統語的アプローチ

まず、Oyakawa (1975) を検討する。Oyakawa では、次の3つの基本的条件がまず提案される。

- (i) シカとナイが同節要素である。
- (ii) シカとナイが互いに統御 (command) し合う<sup>3)</sup>。
- (iii) 節内でのシカは1つに限られる。

ところが、次の (8a) は、(ii) に違反するにもかかわらず文法的な文であるのに対して、(8b) は、上の3条件を全て充すにもかかわらず非文法的な文である ((8a, b) の例文および

樹構造は Oyakawa (1975:6) に基づいている)。

- (8) a. 母親は 息子に 勉強シカ させナカった。

[<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> 母親] [<sub>VP</sub> [<sub>NP</sub> 息子] [<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> 息子] [<sub>VP</sub> [<sub>NP</sub> 勉強シカ] [<sub>V</sub> S-]]]  
[<sub>V</sub> させナカった]]]。

- b. \*母親は 息子に 勉強シカ しナクさせた。

[<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> 母親] [<sub>VP</sub> [<sub>NP</sub> 息子] [<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> 息子] [<sub>VP</sub> [<sub>NP</sub> 勉強シカ] [<sub>V</sub> しナク]]]  
[<sub>V</sub> させた]]]。

そこで, Oyakawa では, (ii) が次のように修正される。

- (iv) ナイはシカを統御 (command) しなければならないが, 逆は必ずしも必要ではない。

しかし, (iv) に抵触しない (8b) が依然として非文法的であることが説明されなければならない問題として残ることになる。そこで, さらに (iv) が廃され (v) とされた。

- (v) 主文述語が「させ」のような “neg-transport-verbs” であり, かつ, 否定辞が主文に  
繰上げられるもとの補文が時制文ではない場合にのみ否定辞上昇は可能である。

とは言え, (v) に抵触する (9b) のような例が文法的であることがなぜかが説明されなければならない。

- (9) a. 太郎は ご飯シカ 食べナカッタ ことがある。

- b. \*太郎は ご飯シカ 食べタ ことがナイ。

そこで, Oyakawa は, 次のような well-formedness condition を設けて (9b) の文法性を説明しようとした。

- (vi) シカを含む文があれば, シカを統御しシカに統御される動詞／複合動詞にナイを付加せよ。

ところが, このシステムでは, (9b) と下の (10b) のような例の文法性の差を説明することができず, 最終的に, Oyakawa では「ある」を “neg-transport-verbs” の例外として扱う措

置がとられることになる。

- (10) a. 太郎は ご飯シカ 食べナイ ことがある。  
b.\*太郎は ご飯シカ 食ベル ことがナイ。

以上がOyakawa 説の概要である。しかし、否定辞上昇構文と呼ばれる構文の成否が、主節述語による制約を受ける例は、別に「ある」に限られない。たとえば、次の(11), (12)のように、「と思う」は否定辞上昇構文を許すが、「わけだ」は必ずしも許すとはいえないという違いがある。それゆえ、Oyakawa 説には、“neg-transport-verbs” が何か、また、その一般的適用条件がどのようなものが明確ではないという欠点があると言えるだろう<sup>4)</sup>。

- (11) a. 私は 花子シカ 来ナイ と思う。  
b. 私は 花子シカ 来る と思わナイ。  
(12) a. 花子シカ 来ナイ わけだ。  
b.?花子シカ 来る わけではナイ。

しかも、Oyakawa 説は、否定辞の繰上げという派生のみを問題とする結果、(9a) と (9b) のような例の間に観察される論理的意味の差を捨象してしまうことになる。

## ② 意味解釈アプローチ

統語的アプローチに対して、Kato (1985) は、否定辞の主文への繰上げを認めず、橋表現を仮定することによって、NPI (否定対極表現) はあくまでS構造において認可されると主張する。そこで、上の (11b) に対しては、次の(13)のような構造を提案する (Kato, 1985 : 163)。

- (13) 私は [<sub>s</sub> 花子シカ 来る] と思わナイ。

また、Kato はシカの意味を次の(14)のように定義し、「シカ・・・ナイ」は、non- $\alpha$  (範例的關係にある要素集合における $\alpha$ の補集合) の存在を照射することによって、間接的に $\alpha$ の唯一性を示唆することにあると述べた<sup>5)</sup>。すなわち：

## (14) Negative sentence with SHIKA

Presupposition:  $\alpha \in \lambda x f(x)$

Assertion:  $\sim \exists x \neq \alpha \in \lambda x f(x)$

( $\alpha$  is (i) an element in the presuppositional set and (ii) the one that SHIKA

is attached to.)

(Kato, 1985 : 99)

さらに、「とは限らない」「と思わない」「わけではない」「て V ない」「ことができない」「覚えがない」「に至らない」などの橋表現が、(i) 抽象的意味内容、(ii) 非語彙的範疇、(iii) 補文の下位範疇化の3点を共通項としてもつことを観察している (Kato, 1985 : 167)。

このような Kato に代表される意味解釈アプローチの利点は、派生を考えないことにより、統語的アプローチの欠点であった “neg-transport-verbs” を限定し、その一般的適用条件を設定することの難しさを克服できる点にある。

しかし、冒頭でも触れた通り、先程の(13)は「花子シカ」がト節の外に出ている下の(15)のような構造かもしれない。ト節は「そう」によって代用されることが知られている (中右, 1984, Takubo, 1985) が、(15)は「そう」がト節を代用する次の(16)によって裏付けられそうである (cf.4.1)。

(15) 私は 花子シカ [s φ 来る] と思わナイ。

(16) 私は 花子 (に関して) シカ [そう] 思わナイ。

とすれば、移動を考えず、ア・プリオリに設定されているものとして橋表現を仮定する Kato のシステムは、以下の諸点について十分な説明を与えることはできないと言えるのである。すなわち、なぜシカがト節の外に出ているのか。もともと補文に属していたものが主文に繰り上げられるという意味で、いわゆる繰上げ述語に分類される「思う」を主節述語にとり、意味的にも (11a) と互換可能な (11b) のような例に対して、なぜ (9b) との互換可能性がない (9a) のような例があるのか。さらに、両文の意味の違いは何に起因しているのか。しかも、これと同じ不十分さは、McGloin (1976) など語用論的なアプローチをとる先行研究でも観察されるものである。

以上に概観した先行研究は、単文構造をもつ「シカ・・・ナイ」構文についての現象を一通り観察した。とはいえ、複文におけるシカとナイの移動や意味の違いを引き起こす原理が何かは未だ不分明である。以下では、上の (9a) と (9b) のような例に観察される論理的意味の違いが生じるメカニズムの解明に焦点を絞って考察しよう。

### 3 「シカ・・・ナイ」構文の意味論

Kato (1985 : 167) では、(14) が「シカ・・・ナイ」の意味として提案された。しかし、実際はもっと複雑である<sup>6)</sup>。

### 3. 1 シカのスコープと述語のタイプ

[s... [s.....] ...] のような複文構造における下の (17a) と (17b) の論理的意味の差は、シカのスコープが補文に限定される狭いスコープをとるのか、それとも、補文を越えて文全体にまたがる広いスコープをとるのか、というシカのスコープの問題でもある（シカはナイと常に応答する関係にあるので、このことを裏返せば、これは否定のスコープの問題でもある）。ここでは、前者を「W (ide) スコープ」、後者を「N (arrow) スコープ」と呼んでおく。

- (17) a. (花子は) そこへは 自転車でシカ 行ったことがナイ。(W スコープ)  
b. (花子は) そこへは 自転車でシカ 行かなかったことがある。(N スコープ)

この2つのスコープの違いを考える上で考慮しなければならない問題の1つに主節述語のタイプがある。「シカ...ナイ」構文に関わらず、一般に、否定辞上昇構文を許す主節述語は特定のクラスの動詞に限定されていた。しかし、主節述語になり得る動詞は、さらに、補文に限定されたシカのスコープをそのまま主節に通過させる性質をもつものと、もたないものと2分される。前者はいわゆる繰上げ述語と呼ばれるものだが、ここでは、前者を「Ⅰ類述語」、後者を「Ⅱ類述語」と呼んでおこう。

Ⅰ類述語には「思う」「考える」「信じる」「ほしい」「させ」「られ」「たい」「はずだ」「つもりだ」「(ことに) する」「(ことに) なる」などがあるが、Ⅰ類述語の中核は思考および様相を表す動詞である<sup>7)</sup>。また、Ⅱ類述語には「(ことが) ある」「に至る」などがある。

こうしたⅠ類述語の例として、ここでは「ほしい」を含む次の(18)の例を見てみよう。先にも触れた通り、表層構造の違いにも関わらず (18a) と (18b) は意味を変えずに交換することができ、スコープの違いは問題にならない。

- (18) a. 私は 花子に シェイクスピアしか (を) 読んでほしくナイ。  
b. 私は 花子に シェイクスピアしか (を) 読まナイでほしい。

ところが、Ⅱ類述語の例である「(ことが) ある」を見てみると、上の(17)のように、(17a) と (17b) とは意味を変えずに交換することができず、シカのスコープが問題になってくる。

### 3. 2 シカの限定機能



### 3. 2. 1 単文の場合

ここで、Ⅱ類述語を主節述語とする上の(17)の a 文と b 文, また同様の(19)の a 文と b 文とを比較して, その意味上の差を考えてみよう。

- (19) a. 花子は 水シカ 飲んだ ことがナイ。  
b. 花子は 水シカ 飲まなかつた ことがある。

どの例も共に少なくとも(20)の意味を含むと考えられる。

(20)

(17) : (花子は) 自転車だけで行った。

$\text{Exist}(t) \text{ all}(y)[(t < t_0) \text{ and } (\text{go}(t, H, y) \rightarrow \text{jitensha}(y))]$   
( $t$  : time.  $H$  : Hanako.)

(19) : (花子は) 水だけを飲んだ。

$\text{Exist}(t) \text{ all}(y)[(t < t_0) \text{ and } (\text{drink}(t, H, y) \rightarrow \text{water}(y))]$   
( $t$  : time.  $H$  : Hanako.)

ところで, 冒頭でも触れた通り, 文の意味を変えずに (17b) は下の(21)に言い替えることができる。

(21) 自転車でシカ行かなかった。

(21)のような単文構造をもつ「シカ・・・ナイ」構文の意味 ((20)のような論理形式をもつ) は, まず, ①「xで行く」の x の値として, シカが「自転車」を除く全てを量化し, 次に, ②①を前提にナイがそれを排除する結果, ③(当該文が与える値という意味での) 現在値「自転車」が特立される, という過程を経て生成されたということができよう。①がシカの導入する前提(限定機能)であり, (20)は, それとナイとの相互作用により生成された意味である。

### 3. 2. 2 複文の場合

ところが, 上の (17a) (19a) は(20)を含意するだけではなく, 他に, 下の(22)のような内容も同時に含意としてもつ。それに対して, (17b), (19b) は(20)を含意するだけで, (22)を含意することはない。

- (22) 複数回行われる事態の集合からどの事態を取り出しても、それは「自転車で行く」「水を飲む」である。

つまり、(17a) が (17b) の表す必然性のない(22)を意味するのに対して、(17b) に(22)の意味を当てることはできない。言い替えれば、(17a) は(21)だけを含意するだけでなく、次の(23)を意味するというわけである。

- (23) そこへ行く手段は イツモ 自転車だった。

すなわち、(17b) (19b) では、シカにより「x で行く」「x を飲む」の x に関し「自転車」「水」を除く他の全ての値が量化され、かつ、ナイにより排除される結果、x の値が「自転車」「水」に限定されることが示されている。しかも、(17b) (19b) のコト節が表す事態そのものが、数回行われた事態の中の個別的・特定の事態として部分限定され、それが存在量化されている。

これに対して、(17a)、(19a) では、複数回行われる事態の部分ではなく、その全体が問題とされている。それゆえ、これらの例では、シカにより「x で行く」「x を飲む」の x に関し「自転車」「水」以外の値を含む事態の全てが量化され、かつ、それらがナイにより排除される。その結果、前提される複数回行われる事態の集合からどれを取り出しても、それは「自転車で行く」「水を飲む」であるという読みが表現されることになる。このような意味をもつ (17a) の論理形式は次のように表示されると考えておこう。

- (24)  $\text{All}(t) \text{ all}(y)[(t < t_0) \text{ and } (\text{go}(t, H, y) \rightarrow \text{jitensha}(y))]$   
(t : time. H : Hanako.)

このように、(24)と上述の(20)の論理形式の間（すなわち、(17a) と (17b) の間）に見られる論理的意味の差は、次の例においては「いつも」、「一ヶ月間だけ」/「ある時期」との共起可能性の違いとして観察されるものである。

- (25) 東京へは {いつも／\*一ヶ月間だけ} 新幹線でシカ 行ったことがナイ。  
(26) 東京へは {\*いつも／ある時期} 新幹線でシカ行かナカッタ ことがある。

以下では、(17a) と (17b) が表す(24)と(20)の2つの意味を、前者では複数回行われる事

態の全体が問題とされているという意味で「属性的解釈」、後者ではその部分である個別的事態だけが問題とされているという意味で「指示的解釈」と呼んで区別しよう<sup>8)</sup>。

### 3. 3 単文 vs. 複文

単文構造をもつ上の(21)のような「シカ・・・ナイ」構文では、シカの限定の対象は専ら「xで行く」のxの部分であり、自転車を除く全ての手段が量化され、ナイにより排除されて、「自転車だけで行った」という指示的解釈が生じた。ここでは、排除すべき領域を限定した上で排除するこのような否定方式を仮に「領域形成否定方式」と呼んでおく<sup>9)</sup>。シカは、基本的には、「Aシカ」により「Aを除く全て」(A')を量化し、後にナイにより排除されるべき範囲として予め限定するという限定機能をもつ形式であった。

ところが、特にⅡ類述語を主節述語とする複文構造をもつ上の(17a, b)では、シカ・ナイの統語構造上の位置により、指示的解釈の他に、「イツモそこへは自転車だけで行った」という属性的解釈が生じうるのであった。領域形成否定方式が「シカ・・・ナイ」構文一般に当てはまる基本的な否定方式であることは確かであるとしても、(21)から生ずる必然性のない属性的解釈が、(17)では、なぜ、どのような過程を経て生じるのか。この点がなお検討を要する問題であり、Ⅱ類述語を主節述語とする文では、このシカの基本的な限定機能に統語構造がなんらかの形で関わっていると言えそうである。そこで、次章では、Ⅱ類述語を主節述語とする文における統語構造と解釈の関係に着目して、この問題を考察しよう。

## 4 「シカ・・・ナイ」構文の統語構造と意味

### 4. 1 シカの位置

シカにナイとの同節要素の条件を仮定するなら、次の(27b)は(28)のような構造をもつと考えなければならない。

- (27) a. 私は 花子シカ 来ナイ と思う。  
       b. 私は 花子シカ 来る と思わナイ。  
 (28) 私は [花子シカ [ø来る] と思わナイ]。

その場合、問題となるのは、(28)においてシカが補文(ト節)の外に出ているかどうかという点である。そこで、次のようなテストを行ってみよう。まず、先述した通り、ト節は「そう」

によって代用されることが一般に知られている（cf. (29)）。そこで、(30)－(32)の a 文のト節を「そう」で受けてみると、シカが補文内にある c 文よりも、補文の外に出ている b 文の方が高い適格度を示す<sup>10)</sup>。

- (29) a. 太郎が [花子がケーキを半分食べた] 思っている。  
b. 次郎も [ そう ] 思っている。
- (30) a. 彼は 花子を 横顔シカ 可愛い と思っていナイ。  
b. 彼は 花子を 横顔シカ [そう] と思っていナイ。  
c. ??彼は 花子を [ そう ] と思っていナイ。
- (31) a. フランス人にシカ 本をプレゼントした ことがナイ。  
b. フランス人にシカ [ そうした ] ことがナイ。  
c. ?? [ そうした ] ことがナイ。
- (32) a. 自転車では そこへシカ 行った ことがナイ。  
b. ?自転車では そこへシカ [ そうした ] ことがナイ。  
c. ??自転車では [ そうした ] ことがナイ。

ところで、シカの補文の外への移動に関連する問題として、シカが補文の外に出ているのは、日本語の特性である自由語順的性質が起因すると考えられる移動の1つ“かきまぜ”操作の適用による結果だということが考えられる。しかし、ここでは、以下の阿部（1991）の議論を用いて、シカが“かきまぜ”によって移動したのではないことを示そう。

まず、次の(33)と(34)を比べられたい。同節要素の条件を守る(33)は容認可能な文である。しかし、かきまぜによる(34)は、表面上同節要素の条件が守られているかに見えるが、容認不可能な文である。

- (33) 太郎が 花子を 横顔シカ [t 可愛い] と思っていナイ。  
(34) \*ケーキを 半分シカ 太郎が [花子が t 食べた] と思っていナイ。

したがって、シカとナイは、かきまぜによって移動したのではないと言ってよい。このように考えると、表面上同節要素の条件に合致しない次のような文が容認可能であることを説明することができる。

- (35) ケーキを 半分シカ 太郎が [花子が t 食べナかった] 思っている。

すなわち、(35)が容認可能なのは、かきまぜられた名詞句が Logical Form (以下、LF と  
いう) で元に戻ると仮定すると、(35)の LF 表示は下の(36)のようになり、LF の段階で同節要  
素の条件を満たしていると考えられるからである。

(36) 太郎が [花子が ケーキを 半分シカ 食べナかった] と思っている。

以上を承認するとして、(17)や(30)–(32)のような文では、シカの移動はどのような動機に  
よって引き起こされ、また、それは何を意味しているのだろうか。次節では、これらの点につ  
いて、Ⅱ類述語を主節述語とする文を中心に、検討しよう。

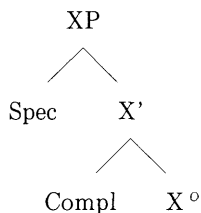
#### 4. 2 Ⅱ類述語の場合

次の例では、(37a) が属性的解釈を受け、(37b) が指示的解釈を受ける。

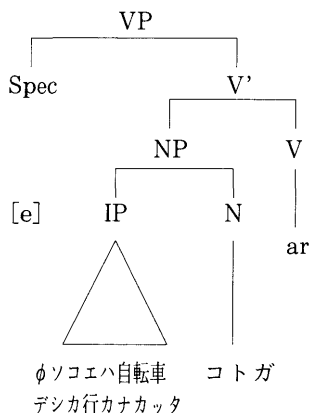
- (37) (= (17)) a. そこへは 自転車でシカ 行った ことがナイ。(属性的解釈)  
b. そこへは 自転車でシカ 行かナかった ことがある。(指示的解釈)

まず、(37b) ではシカ・ナイがコト節に留まり移動は生じない。そこで (37b) は次の(38)  
のような D 構造をもつと考えられる。なお、ここでは、(37b) と (37a) の間に見られるシカ  
とナイの位置関係を構造上の差異として捉えるために、X' 理論に基づいて以下のような構造  
を考えた。X' 理論とは全ての句 XP に共通する内部構造を定めたもので、その概略は図 1 の  
ように表される。XP は最大投射、X' は中間投射、X<sup>0</sup> は主要部、XP に直接支配される位置は  
指定部 (Spec), X' に直接支配される位置は主要部 X<sup>0</sup> の補部 (Compl) の位置である。指定  
部は A' (非項) 位置とも呼ばれ、D 構造で項が生起しない位置であり、移動した要素の着地点  
となる。ただし、本論の主眼は、意味と形式の対応関係を明らかにすることにあり、ここでは  
樹構造の概略を提案するにとどめたい。

[図 1]

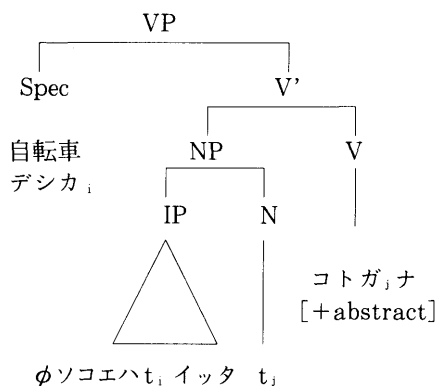


(38)



これに対して、(37a) では、次の(39)のように、コトが繰上げられることによって、まず橋表現「ことがない」が形成される。そして、これと平行的に、シカも、本来支配されていたコト節から、ナイに統率される位置である [Spec, VP] に移動すると考えよう。

(39)



[Spec, VP] は、A' 位置である。それゆえ、(先程の (37b) ではシカは補文内において「自転車を除く全て」を量化し、排除すべき対象として限定したのだが、) (37a) では、A' 位置への移動により、「自転車でシカ」はコト節に残された痕跡  $t_i$  (要素の移動後、元の位置を示す) を束縛する一種のオペレータとして機能する。その結果、「そこへは  $t_i$  行った」が導入する事態の集合から、「そこへは自転車で行った」を除く全ての事態が、ナイにより排除されるべき対象として量化され、限定されて、「そこへ行く時はイッモ自転車で行った」という読みが生じると考えられる。このように、統語的には束縛関係にたつことで、シカが広いスコープをとる属性的解釈をうることがシカのコト節から主節への移動の動機である。

そして、このことを意味論的に言うと、このような要素の外置を許すコト節などの主要部は、[+abstract] の素性をもつものに限るという制約が設けられることになるのだが (cf. (39)), この点については、その理由も含め、次節で詳しく述べる。

ちなみに、両文におけるシカの機能は矛盾するものではないが、主節述語がⅡ類述語の場合、シカが主文へ移動し、コト節を越えた広いスコープをもつことによって、コト節の導入する状況全体を量化の対象とすることが可能になる。その意味で、(37a) (37b) は統語構造と意味とが対称的な関係にあり、(37a) では (37b) に比して、シカの量化のレベルが、統語的にも意味論的にも一段上がっているということがいえよう<sup>11)</sup>。

#### 4. 3 量 化 補 文

シカ・ナイの移動の可否は主節述語のタイプだけで決まるわけではない。シカの外置を許す(37a) のような例のコト節が通常の修飾節構造とは異なるという指摘は、これまでにみなされてきた (McGloin, 1976)。ここでは、このような観察をさらに押し進め、先に触れたシカの移動を許す補文の主要部を構成する名詞句は [+abstract] 素性をもたなければならないという制約があることについて検討する。

前節では、(37a) で、シカが A 位置から A' 位置へ移動する動機は、シカがオペレータとしてコト節内の痕跡を束縛することにより、「自転車で行く」を除く全ての事態が否定の領域として限定され、最終的に、「そこへ行くときはいつも自転車を使った」という属性的解釈をうためであることを指摘した (cf. (39))。これは、(37a) では、複数回行われる事態の集合として、コト節が導入する状況全体が量化の範囲として前提されていることを意味している。そこで、ここでは、このような意味をもつ補文を、通常の修飾節と区別するために仮に「量化補文」と呼ぼう。

量化補文は、たとえば制限的修飾節と比較してみた場合、次のような違いを示す。制限的修飾節は一般に、指示性の低い被修飾名詞句を限定する機能をもつ。そのため、次の(40)のように一つの被修飾名詞句に対して複数の制限的修飾節を積み重ねることができる。しかし、当該補文の表す事態が複数回行われることを示す量化補文では、補文が表す事態以外の全ての事態が排除されているため、次の(41)(42)のように、一つの被修飾名詞句に対して複数の補文を積み重ねることができないのである。

(40) おばあさんが買ってきた、おじいさんが飲んだ お茶がある。

(41) \*そこへは 夢でシカ行った、自転車でシカ行った ことがナイ。

(42) \*現行犯シカ逮捕された、殺人犯シカ死刑になった 前例がナイ。

また、前節で、シカの外置を許す量化補文は、その主要部に [+abstract] 素性をもった名詞句を要求することについて触れたが、実際、橋表現を形成しうる名詞句は、抽象物を表すも

のに限られる傾向がある。たとえば、次の(43)と(44)を比べてほしい。

- (43) a. 彼には（飛行機嫌いで）船でシカ 外国に行かナイ 妻がいる。  
b. \*彼には（飛行機嫌いで）船でシカ 外国に行く 妻がいナイ。
- (44) a. 彼は A大学にシカ 合格できナイ 可能性がある。  
b. 彼は A大学にシカ 合格できる 可能性がナイ。

橋表現を形成できない(43)の「妻」は、その指示対象が唯一的に同定可能な名詞句である。一方、橋表現を形成しうる(44)の「可能性」はその指示対象を同定しえない漠然とした抽象物を表す。さらに、シカの繰上げを許す次の(45)－(47)では、特定の対象を指示する「その」や「あの」を量化補文の主要部（橋表現）を構成する名詞句に付加できないが、シカの繰上げを許さない(48)では「その」を付加することができるという違いがある<sup>12)</sup>。

- (45) \*彼は 英語シカ 話した そのことがナイ。  
(46) \*花子は 音声学でシカ 可をとる その恐れがナイ。  
(47) ? \*殺人犯シカ 死刑になった その前例がナイ。  
(48) a. おじいさんシカ 飲まナカッタ そのお茶がある。  
b. \*おじいさんシカ 飲んだ そのお茶がナイ。)

したがって、シカの移動を許す量化補文の主要部を構成する名詞句は、それだけでは唯一的に指示対象が定められない不定名詞句か、指示的ではなく属性的な解釈をもつ定名詞句のどちらかだということができる。

これは、補文が特定の出来事を表す場合に、もしシカが外置されたとすると、シカは、複数回行われる事態のうち当該補文を除く事態の全体ではなく、その部分を否定の範囲として限定することになり、「現在値を除く全て」を量化するというシカの基本的な限定機能と矛盾することになるからである。

このことを言い替えるなら、シカが補文から外置される場合には、補文の表す事態が複数回行われるという前提をもつ量化補文が形成されていなければならないと言えるだろう。そして、そのためには、量化補文の主要部を構成する名詞句は、[+abstract] 素性をもつものでなければならないのである。

しかし、I類述語を主節述語とする複文の「シカ…ナイ」構文では、シカ・ナイの統語上の位置の違いが、文の解釈の違いに関わらないのはなぜだろう。次章では、この問題を、I類述語の性質とシカの限定機能との関係に着目して検討しよう。



## 5 統語構造と意味の対称性と述語のタイプ

### 5. 1 主節述語のタイプ

I 類述語から、動词语幹に接辞として付加され、複合動詞を形成する「させ」「られ」「たい」を除こう。そして、これらを I-A 類述語と呼び、残りの I 類述語を I-B 類述語と呼ぼう。本章で考察の対象となるのは I-B 類述語である。

I-B 類述語には、「はずだ」「つもりだ」「思う」「考える」「信じる」「ほしい」などがあり、それらは認識や思考を表すことで特徴付けられる。両者の間には、I-A 類述語では主文にしかナイが生起しえないのに対し、I-B 類述語では主文と補文の双方にナイが生起しうる、といった違いがある。すなわち：

- (49) a. \*母親は 息子に 勉強シカ シナク させた。  
b. 母親は 息子に 勉強シカ させなかつた。
- (50) a. 私は 花子シカ 来ナイ と思う。  
b. 私は 花子シカ 来る と思わナイ。

しかも、(50a) は意味を変えずに (50b) と交替でき、既に触れた通り、I-B 類述語を主節述語とするこれらの文は、表層構造の違いにも関わらず、ほぼ同じ解釈をもち、論理的意味の差を生じない。この点については、「花子以外の人がある」と信じないということ (cf. (50b)) は、結局「花子シカ来ナイ」と信じているから (cf. (50a)) に他ならず、(50a) は (50b) の理由となっているからだという指摘がある (坂原, 1986)。しかしながら、論理的意味の差を生じないにも関わらず、(50a) と (50b) の間には表層構造の違いがあることもまた事実である。

そこでまず考えられることの 1 つは、I-B 類述語を主節述語とする場合と、II 類述語を主節述語とする場合のシカのスコープの差を考慮して、シカのスコープは曖昧になる可能性を含んでおり、シカの移動は随機的だと考えることである。たとえば、(50a) が次の (51a) のような D 構造をもつと考えることもできるだろう。

- (51) a. [<sub>IP</sub> 私 [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> [<sub>C</sub> 花子シカ 来ナイ と] [<sub>V</sub> 思う]]]]  
b. [<sub>IP</sub> 私 [<sub>VP</sub> 花子シカ i [<sub>V</sub> [<sub>C</sub> ti 来る と] [<sub>V</sub> 思わ ナイ]]]]

(51a) では、補文のナイによりシカが統率され、(50a) のS構造となる。もし、ナイによるシカの統率が行われないと、そのままではシカは認可されない。そのため、(51b) のように、シカがナイにより統率される位置である [Spec, VP] に移動して、(50b) のS構造ができる。つまり、シカの移動はナイによる統率という純粹に統語的な動機付けに基づくものだと考えるのである。

ところが、このように考えると、今度は、第4章で述べたⅡ類述語を主節述語とする文における統語構造と意味との対称性についての説明が成立しなくなるのである。

## 5. 2 補文述語

そこで、ここでは、実際には、(50a, b) が (51a, b) のような構造をもつとしても、シカの限定機能と述語の意味および統語構造から文の意味を計算すれば、(50a, b) のようなⅠ－B類述語を主節述語とする例においても、意味と統語構造との対称性は保持されていることを示して、(50a) と (50b) の間に観察される意味の一致は、Ⅰ－B類述語の特性に起因する現象であるという見方を提案する。

### 5. 2. 1 ル形とタ形

そのために、まず着目したいのが次のような観察結果である。(i) シカ・ナイが補文の外に出ている場合、Ⅰ－B類述語を主節述語とする例では、(52)の通り、補文述部にルのついた形（以下、ル形と呼ぶ）、また、Ⅱ類述語を主節述語とする例では、(54)の通り、補文述部にタのついた形（以下、タ形と呼ぶ）が使われるのが一般的傾向であり、ル形とタ形の対立がない。（ル形とタ形の選択に関する(52)と(54)の違いは、Oyakawaにおいて「ある」を‘neg-transport-verbs’の例外とせざるをえなかった理由でもあった。）しかし、その一方で、(ii) シカ・ナイが補文内にある場合には、(53)(55)の通り、どちらも使え、ル形とタ形の対立がある。すなわち<sup>13)</sup>：

(52) a. ??私は 花子シカ 来た と思わナイ。

b. 私は 花子シカ 来る と思わナイ。

(53) a. 私は 花子シカ 来ナかった と思う。

b. 私は 花子シカ 来ナイ と思う。

(54) a. ??彼は 日本語シカ 話す ことがナイ。

b. 彼は 日本語シカ 話した ことがナイ。

(55) a. 彼は 日本語シカ 話さナかった ことがある。

b. 彼は 日本語シカ 話さナイ ことがある。

先に、シカ・ナイが補文の外に出ている文は属性的解釈、シカ・ナイが補文の内側に留まっている文は指示的解釈をもつと述べたが、ル形とタ形の対立がある(53)(55)は指示的解釈、ル形とタ形の対立がない(52)(54)は属性的解釈を表す。

これを主節述語との関係において捉え直すと、Ⅰ－B類述語をとる例でも、Ⅱ類述語をとる例同様、属性的解釈と指示的解釈の間で、補文述語のル形・タ形の対立の有無に関して、コントラストが生じることが分かる。すなわち：

述語のタイプ	例文	補文述語	解 釈
Ⅰ－B類述語	(52)	ル	属 性 的 解 釈
	(53)	ル・タ	指 示 的 解 釈
Ⅱ 類 述 語	(54)	タ	属 性 的 解 釈
	(55)	ル・タ	指 示 的 解 釈

ル形やタ形は、事態が発話時より以前に起こったとか以後に起こるとかいう時間関係に対応するのはもちろんであるが、さらに、タ形には、事態が成立しそれが特定性をもっていることを表示する性格があり、ル形にはない、ということも示す（金水，1987）。

個別的事態を表す指示的解釈を表す例は、主節の時点に基づいて、文脈指示的に補文の時点が決定される。したがって、主節の時点より以前か以後か、あるいは同時に応じて、ル形・タ形のどちらかが選択される。一方、属性的解釈を表す例は、主節述語の性質に基づいて、補文の表す事態が特定性をもっているかないかが決定され、特定性をもっている場合にタ形、もっていない場合にル形が選択される。しかし、ル形・タ形どちらの場合にも、属性的解釈を表す文では、任意の時点に生起する総称的な事態が表されており、文脈指示的に決定される補文の時点としてのル形とタ形の対立は見られない<sup>14)</sup>。

以上は、Ⅰ－B類述語をとる例でも、Ⅱ類述語をとる例同様、シカ・ナイの統語上の位置に対応した解釈の違いが存在しうると示していると言ってよいだろう。

しかし、共に補文述語がル形である(52b)と(53b)の間に、実質的な論理的意味の差が生じないのはなぜなのだろう。

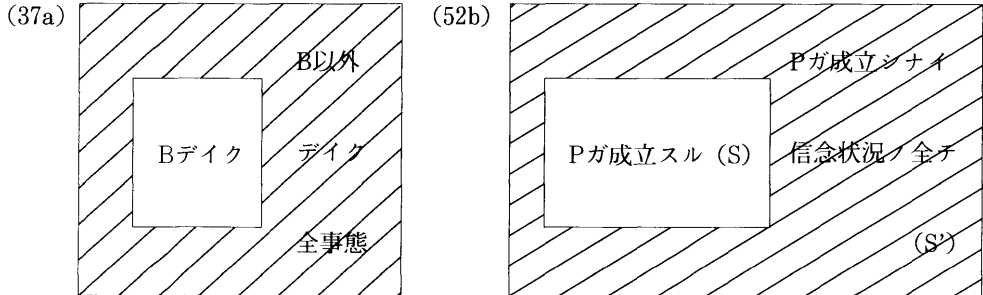
## 5. 2. 2 主節述語の性質

そこで、共にシカ・ナイが補文の外側にある例として、(52b)とⅡ類述語を含む先程の

(37a) とを比べてみてみよう。(37a) では、複数回行われる事態のどの事態を取り出しても「自転車だけで行く」が成立することが意味され、個別的事態を表す (37b) との間に論理的意味の差が見られた。もし、I – B類述語を主節述語とする文にも統語構造と意味の対称性がありうるという上の観察が正しければ、(37a) と (37b) に並行的に、(52b) と (53b) も異なる論理的意味を表すはずである。

しかし、ここで気を付けなければならないことは、(52b) (53b) が共に、補文命題についての蓋然性判断を表している、という点である。Landman (1986) は、ある命題の蓋然性判断は、ある状況で成立すると思われる命題の他の状況での成立可能性、つまり、その拡張可能性を述べたものだ指摘している。

したがって、このような観点からすれば、蓋然性判断を表さない (37a) では、「自転車で行く」以外の全ての事態が排除され、どの事態を取り出しても「自転車で行く」が成立することが意味されたのに対して、蓋然性判断を表す (52b) では、「花子だけが来る」が成立する信念状況以外の全ての信念状況が排除され、どの信念状況でも「花子だけが来る」が成立することを表している、と考えられよう。このような違いを簡単に図示すると次のようになる。(斜線部はシカ・ナイにより排除される領域を表し、Bは自転車、Pは「花子だけが来る」を表す。)



それに対して、(37b) のシカ・ナイが個別的事態について自転車以外の全ての手段を排除したように、(53b) のシカ・ナイは個別的事態について花子以外の全ての人を排除する。このような (53b) は「花子だけが来る」が成立する信念状況が少なくとも1つあることを表していると言えよう。

ここで、Pが成立する信念状況をSとすれば、(52b) は「Sではないもの (S') はない」を意味する。しかし、「Sではないものはない」は「S」に他ならず、両者は次のような等値関係のかたちで表されることに注意されたい。

$$(56) \quad S \text{ ではないものはない } ((52b)) = S \text{ である } ((53b))$$

(56)の等号の右側は(53b)の意味であり、(52b)と(53b)の意味が一致することが分かる。

以上、ここでは、補文におけるル形とタ形の対立の有無から、I-B類述語を主節述語とする文の間にも、原則的には統語構造と解釈の対称性が成立しうるものの、信念や知識状況に関わるI-B類述語の特性から、(52b)と(53b)の間に実質的な論理的意味の差が生じなくなること示した。

## 6 お わ り に

本論では、複文構造をもつ「シカ…ナイ」構文に生じる論理的意味の差を、シカの限定機能と統語構造の相互作用の結果として分析した。ポイントは次の通りである。

- (i) 単文構造の「AシカVナイ」では、①「xがvする」のxの現在値Aを除く可能な値の範囲A'を設定し、②Aを特立するシカの限定機能と、A'を排除する自然言語の否定の働きから、「AだけがVする」という解釈が産出される。
- (ii) しかし、II類述語を主節述語とする複文構造では、シカ・ナイの構文上の位置により、論理的意味の差が生じる。
  - (a) 「AシカVしたことがナイ」では、複数回行われる事態の集合からどれを取り出しても、当のコト節が表す事態になり、それを除く他の事態は全て排除されることが示される。
  - (b) 「AシカVしなかったことがある」では、単一の事態について、Aを除く他の値が全て排除されることが示される。
- (iii) このような意味の違いは、シカ・ナイの構文上の位置の違いにパラフレーズされる。  
すなわち：

上の(a)では、補文外に移動したシカが補文の表す事態を除く全ての事態を量化し、ナイにより排除されるべき領域として限定する役割を果たし、補文が表す事態が特立される。

上の(b)では、シカは補文外に移動せず、補文は複数回行われる事態の部分を表すに留まる。

ただし、I-B類述語を主節述語とする文では、(特に補文述語がル形の場合)信念に関わるI-B類述語の性質により、シカ・ナイの統語構造上の位置の差のあるなしに関わらず、同じ論理的意味が生じることになる。

このような事情は、次のような認知様相を表す文においても同じである。

- (57) a. 花子シカ来ナイ {可能性がある／はずだ／恐れがある／つもりだ}。

b. 花子シカ来る {可能性がナイ／はずがナイ／恐れがナイ／つもりがナイ}。

また、上のような本論の分析は、「一度モ」「千分の一モ」などの否定対極表現（NPI）を含む次のような構文の分析にも有効であると思われる。

(58) 彼は 一度モ 授業に出た ことがナカった。

(59) もちろん、私は その千分の一モ 説明できる とは思っていナイ。

(58)(59)は、複文の「シカ…ナイ」構文同様、「一度モ」「千分の一モ」が補文の外に出ているおおよそ次のような構造をしていると考えられる。

(60) 彼は 一度モi [s ti 授業に出た] ことがナカった。

(61) もちろん、私は その千分の一モi [s ti 説明できる] とは思っていナイ。

「一度モ」「千分の一モ」のモは、基本的にはシカ同様「一度」「千分の一」と範例的關係にある要素の範囲を示すという意味で量化の機能をもつ（Kuroda, 1965），そこで、「一度」「千分の一」が最小値を表す，回数や程度の大小によって階層づけられた語用論的な尺度を仮定すれば，尺度の最小値にモが付加された（という意味で最低限用法をもつ）「一度モ」「千分の一モ」の否定により，小量性強調が引き起こされ，「一度さえ出なければ，当然どの授業にも出なかった筈だ」「千分の一さえ説明できなければ，当然全く説明できない筈だ」という推論により，全称否定の解釈をうることが容易に想起される。すなわち，(60)(61)では，移動したモがコト節，ト節に残された痕跡tiを束縛し，ナイにより否定されるべき領域として全称量化する。その結果，これらの例では，「x度授業に出る」「(千分の) x 説明できる」という開放命題（変項を含んだ命題）の集合のどれを取り出しても「授業に出る」「説明できる」が成立しないことが意味されることになる。シカ同様，モの補文の外への移動も，このような意味構造を得るために動機付けられた移動であると考えられることができる。

[ 注 ]

- 1) 「同節要素」とは，「それらを支配するすぐ上の S (=IP) が同一である要素」のことである。
- 2) ただし，(3a) については，これを次の例のような，複数回行われた事態のうちの一回ないしは数回について述べるという状況を示唆するコンテキスト抜きでは，許容できないというインフォーマントもいる。

一映画には何度も行っているが、あるとき、前に背の高い人が座ったため、  
スクリーンが半分シカ見えなかったことがある。

- 3) 任意の2つの節点 $\alpha$ ,  $\beta$ があり、そのどちらも他方を支配 (dominate) せず、 $\alpha$ を最初に支配するS節点が $\beta$ を支配する場合、 $\alpha$ は $\beta$ を統御 (command) するという (Langacker, 1969)。たとえば、下図のBを支配する最初のS節点がAであり、AはCを直接支配している。したがって、BはCを統御する。



- 4) NPIあるいは橋表現を含む否定辞上昇構文の容認可能性は、Kato(1985)(cf.注7))も指摘するように、個々のNPIと橋表現の性質により一様ではない。
- 5) ラムダ変数の $x$ は、集合を表現するために導入している変数であり、否定的に存在量化されている $x$ とは異なる。その意味で、(14)は不適切だとする批判がある。
- 6) 本稿では取り上げなかったが、同じ欠点は沼田(1986)におけるシカの分析にも見られる。
- 7) Kato(1985)は、次のような橋表現のスケールを提案し、強いNPIほどweakな橋表現の補文内であっても容認可能であるが、弱いNPIほどstrongな橋表現の補文内であってもその限りではない、としている。

weak	—————	strong
とは限らない	わけではない	てVない／と思わない／に至らない ことがない／ことができない {覚え／余裕／見込み}がない

- 8) 属性的・指示的解釈はDonnellan(1966)がたてた限定記述に対する2つの解釈の名称である。
- 9) 「領域形成否定方式」は「シカ・・・ナイ」構文に限らず、広い否定のスコープを生成する一般的、な方式として考えている (cf. 山森(1993b)など)。
- 10) (30)は阿部(1991)より引用した。また、(31)は小川曉夫氏にご教示頂いた。
- 11) また、このような分析は、「彼はまずいものシカもってこナイ」や「彼はおいしいものシカ食べに行かナイ」、「そのチンプは3語シカ話すに至らなかつた」のようなテVナイ・ニVナイ構文においても、～テ従属句 (V1+テ+V2)・～ニ従属句 (V1+ニ+V2) が、(英語の動名詞句や不定詞句のように)、(39)のNPに代えて、主節動詞の補文を形成していると考えられるなら、そのままこれらの構文にも適用でき、ある程度の一般化が成立していると考えられる。
- 12) (48a)に比して、次の文がよくないのは、「お茶を飲む」は言えるが、「そのコトを飲む」は言えないという違いに帰着される現象であると考えられる。
- \*おじいさんシカ 飲まなかつた そのコトがある。
- 13) (52a)はコンテキストによっては容認可能になることがある。しかし、ここで重要なことは、(52b)との対比において、(52a)の容認度が落ちることである。
- 14) (52b)の補文は、事態の成否を確認しえないという意味で、存在的・特定のには捉えられない事態を表す。それゆえ、特定性を表示しえないル形だけが、原則的に生起可能である。これに対して、タ形だけが、原則的に生起可能な(54b)の補文は、存在的・特定のに捉えられる事態を表す。しかし、次のような時間副詞との共起関係が示す通り、タ形は任意の時点を指し、(54b)は同じ事態が複数回生起するという属性的解釈を表すと考えられる。
- 彼は { \*昨日／いつも } 日本語シカ 話した ことがナイ。

〔参考文献〕

- 阿部 忍(1991):「認識動詞構文のシンタクス」,大阪大学修士論文.
- Aoyagi, H. & Ishii, T. (1994) "On NPI Licensing in Japanese", *Japanese and Korean Linguistics* Vol.IV, CSLI, pp.295-311.
- 井上和子(1976):『変形文法と日本語』,東京,大修館書店.
- \_\_\_\_\_(1978):『日本語の文法規則』,東京,大修館書店.
- Kato, Y. (1985): *Negative Sentences in Japanese*, *Sophia Linguistica* (monograph), Tokyo, Sophia University.
- 金水 敏(1987):「時制の表現」,山口明穂(編)『国文法講座』6,東京,明治書院, pp.280-298.
- Kuroda, S.Y. (1965): *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Landman, F. (1986): *Towards a Theory of Information: The Status of Partial Objects in Semantics*, Foris Publications. Dordrecht.
- McGloin, N. H. (1976): "Negation", Shibatani (ed.). *Syntax and Semantics* 5, New York, Academic Press, pp.371-419.
- Muraki, M. (1978): "The Sikanai Construction and Predicate Restructuring", Hinds & Haward (eds.), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha, Tokyo.
- 中右 実(1984):「質疑応答の発想と論理」,『日本語学』3-4,東京,明治書院, pp.13-20.
- 太田 明(1985):『否定の意味』,東京,大修館書店.
- Oyakawa, T. (1975): "On the Japanese sika-nai Construction",『言語研究』67. pp.1-20. 日本言語学会.
- Takubo, Y. (1985): "On the Scope of Negation and Question in Japanese", *PIJL* 10, pp.87-115.
- 坂原 茂(1986):「“さえ”の語用論的考察」,『談話行動のモデル化に関する認知科学的研究』(課題番号:59490018), pp.48-80.
- 山森(松井)良枝(1993a): "Japanese Negative Questions as a Communicative Meta-Sign", paper presented at 4th International Pragmatics Conference, July 25-30, 1993, in Kobe.
- \_\_\_\_\_(1993b):「限量表現と否定のスコープについて」,『神戸大学留学生センター紀要』,



第1号, pp. 1-38.

\_\_\_\_\_ (1994a) : 「自然言語における否定の曖昧性について」『日本認知科学会第11回大会発表論文集』, pp.136-137.

\_\_\_\_\_ (1994b) : 「アスペクチュアリティーと否定のスコープ」, 第7回日本文法談話会発表資料.